四国大学紀要，(A)42：95－98，2014
Bull. Shikoku Univ. (A)42：95－98，2014

研究ノート

# 賀川豊彦の再評価に関する一考察

土内俊介・萩原八郎

## A Study on the Requalification of KAGAWA Toyohiko's Thoughts

Shunsuke TUCHIUCHI and Hachiro HAGIWARA

### はじめに

今，賀川豊彦（1888～1960）に再び光が当てられている。経済学者の野尻武敏によるとそれは以下の３つの点による[1]。

1．人間関係の喪失や豊かさの中の貧困を指摘した賀川豊彦による資本主義批判は今日においても妥当である。
2．第２次世界大戦におけるドイツとイタリアの敗戦によってナチズム，ファシズムが凋落し，ソ連型社会主義もソ連の崩壊によって消滅した。これによってアメリカによる一極支配が完成されたが，金融危機によって「市場原理主義」という土台が大きく揺らいできたことから，賀川思想が「第３の道」として現実味を帯び始めた。
3．賀川は戦前，「兄弟愛の経済学（Brotherhood Economics)」を提唱し，そのなかで「われわれが自然資源を食い尽くしていると，（資本主義のもとでは）悲惨と貧困の恐ろしい状態が起こる。そうなると，生活を護守り経済状態を公正に調整していくために，兄弟愛の運動がどうしても必要になる[2]」と述べている。このことが資本主義のもとで格差が拡大している現代においてあらためて思い知らされている。

その一方で，小林正弥はコミュニタリアニズム（Communitarianism）の観点から賀川が再評価されていると主張する[3]。筆者らは，このように再評価されつつある賀川の思想および賀川が実践したことの整理，再構成を試みる。そこから賀川が現代において再評価されている理由を明らかにする。

### Ⅰ　賀川の生涯とその生涯における思想の実践

賀川豊彦は1888年，７月10日に神戸市にて生まれる。その後1892年に父である純一が死去，その翌年の1893年１月に母である菅生かめが死去する。同月に姉の栄と共に賀川純一の実家である徳島の本家に引き取られ，両親の愛に飢えを感じながら育つ。13歳の時に胸部疾患の診断を受け，15歳の頃，1903年に賀川本家が破産し，叔父である森六兵衛の家に引き取られる。

賀川31歳の時の著作『涙の二等分』の中の表題「薄命―肺を病みて―」において，幼少期から少年期を振り返って次のような詩がある。「夢も結ばず，熱もさめず　唯思ふ――わが生命の　夢と浮ぶを。
立ち上り筆を求めて書く，　わが身薄命　神何をか我に求むと。　五歳の秋　父母と別れ　十六　兄を失って孤独！　身はイエスと　生きんとすれど，
貧しき者は　天国に遠し　肉は（あゝ）亡びぬ。
他に霊もならん，器もなし，　眼をすえて，　自滅の最後，笑んで　待つ[4]。」賀川は幼少期を不遇に暮らし，家族縁が薄く，明日の食事にさえ困っていたようだ。そのような賀川には，精神的支柱が必要だったと考えられる。薄幸な子供たちへの深い愛情が歌われている詩集『涙の二等分』においても見られるキリスト教への信仰心は『死線を超えて』などの自伝系小説の流れを汲む『小説キリスト』とともに，賀川の心情や思考へと肉薄するものである。

このように，幼少期から少年期の賀川は，生きる目的や自身の不遇に対する運命論的な回答を求めていたのである。それは，賀川が信仰を強めていく過程を見れば理解できる。『賀川豊彦全集24』の「無の哲学」という題名の中で，「生存は無価値であり，

ただ死のみが全ての存在にある。したがって死のみが価値あるものと考える。」と述べるほど絶望の底にいた時期があった。しかし，マヤス夫妻の支援によってキリストの愛の探求に傾倒し，常に神が自らを見守っているという解釈を自らの人生に見出す。これより，賀川は盲目的に，だが独自の解釈に基づいて神を信仰する。それは，賀川の思想がその基礎を完成させたことを意味する。

賀川の思想の基礎とは，神イエスを「行動の神」と呼び，教会内で聖書を読み，祈祷や瞑想を行う者にではなく，悩める民衆や虐げられた人々を助け起こす者，民衆の中に飛び込み，民衆の罪と失敗から民衆を救い出そうと努力する者と共にある神であると考えている。これは賀川が絶えず民衆の中に身を置くことを欲し，そして賀川自身が主張していた「兄弟愛」を体現しようとしていたことと軌を一にしている。

賀川が神戸で「救貧活動」を始めたのは1909年，21歳の時。そして，24歳から本格的な活動の始まりとして貧民街内に一膳飯屋「天国屋」を開業した。その後，28歳の時アメリカで見た労働者の示威活動から貧困者同士が団結する経済活動の方法論「協同組合論」を構築。翌年には貧民街で無料巡回診療と歯ブラシ工場を始める。この無料巡回診療は現在のホームヘルパーなどの事業のさきがけといえる。また，歯ブラシ工場は「救貧」から「防貧」へと思考が発展したことを指す。その後は協同組合を中心とした「防貧活動」とキリスト教の伝道活動に尽力していく。1920年，中国の上海付近への講演旅行を皮切りに，この頃から海外での伝道活動も始まっている。1924年11月から翌年７月にかけて，全アメリカ大学連盟の招きをうけ渡米，イギリス，フランス，デンマークほか，さらにはトルコからシリアのベイルートを経て，エルサレムに入り，聖地巡礼を行っている。

賀川は敬虔なキリスト教徒で，生涯を通して神を疑うことをしなかった。1926年，38歳となった賀川は，「百万人の救霊（キリスト教信者の獲得）」を掲げ，これを「戦い」と呼んだ。これを実現するための「神の国運動」を開始する。その後，計４度にわたってノーベル平和賞候補者として推薦されるが，授与されることはなく，1960年４月23日，71歳で死去した。

戦前から戦後の賀川の献身的な働きにより1961年，全国伝道の決心者は３万人を越えた。これは賀川の思想に強く共鳴した者が３万人いたことを示している。

## Ⅱ　賀川の思想の根幹

賀川はキリスト教徒である。1904年２月，15歳の時に宣教師 H.W.マヤス（Harry W. Meyers）から洗礼を受ける。賀川はその数年前から胸部疾患の診断を受けていた。くわえて幼少期に相次いで両親を亡くし，家族という温かな人間関係から程遠い環境で育った賀川には，キリスト教の教える愛が魅力的に思えたのだろう。

賀川は11歳の時，禅寺にて孟子の素読を受けているが，感銘や共感を持つことはなかったと振り返っている。一方で，賀川がキリスト教の思想と初めて接触したときも，賀川はキリスト教の教えに共感を持つことはなかったという[5]。

しかし，その後宣教師 C.A.ローガン（Charles A. Logan）の聖書朗読会に参加したことをきっかけとしてキリスト教へと入信する。賀川によると，ローガンとマヤスは親のように賀川に接し，賀川自身もまた子のように彼らに接した。これは10代の頃，身を寄せていた賀川家の破産や自身の病気などの困難に直面した賀川が何よりも家族のような人間関係を欲していたからだと考えられる。これこそが賀川の思想の根幹を形成するものである。

明治学院在学中の18歳の時に徳島新聞に連載された「世界平和論」において，あらまし次のように持論を述べている[6]。欧州列強の帝国主義的な膨張を日本も見習うべきとの風潮に対し，帝国主義は弱肉強食の権力主義であり，土地国有，普通選挙，財産の平等使用などの社会主義の実現こそが世界の平和をもたらす。この理想的な社会こそが神の国の実現だと主張した。

## Ⅲ　賀川豊彦がコミュニタリアニズムの観点から再評価される理由

賀川は家族のような関係を欲し，家族のような人間関係による平和な世界の実現を目標とした。それが「神の国運動」と呼ばれるものである。したがって，小林によって主張されている賀川のコミュニタリアニズムの観点からの再評価は，この家族のような社会的結合によって人間集団を形成することを根拠としている。

コミュニタリアニズムは，アリストテレスの「共通善の政治学」を始祖としている。アリストテレスによると人間が共同生活を行うコミュニティは何らかの善を目的化して組織される。したがって，賀川思想の根幹にある家族のような人間関係によって形成された社会を共通善と解釈した場合，賀川の思想は近代的な「共通善の政治学」として扱うことが可能となる。このように，今日肯定的な人間関係として訴えられている絆などの可視化も数値化も困難なものの必要性を60年以上前に訴えていた点から，賀川の思想が今日において改めて重要な役割や意味を持つのである。

しかし，賀川が求めた家族のような社会的結合とは，キリスト教を基礎とした社会主義的な集団であった。宗教については「いろいろ雑多な宗教が，今日世に行われている。…即ちそれは，…七福神その他の幸の神信仰であり，…その他いわゆる淫祠邪教の民族宗教である。…これらの宗教は人間の良心生活と全く交渉のない宗教である[7]」と主張している。淫祠とはいかがわしいものを意味し，邪教とは現実世界に害を与える正しくない宗教を意味する。つまり，キリスト教こそが利益，社会風習，権力，色欲，社会組織，良心を満たすとしている。しかし，現実世界にはキリスト教以外にも人々を救済する神は存在するし，キリスト教以外を信仰している人々も多くいる。賀川は家族のような社会的結合の実現のために，真剣に全人類をキリスト教徒にさせようとしていた[8]が，異宗教間で対話による平和的な共存関係を築き，より多様性に富んだ平和的な家族的社会を構築することも，不可能ではないはずである。

## Ⅳ　賀川の「神の国」,「協同組合」構想

賀川はキリスト教の伝道師として「救貧」活動を通して「防貧」という考えを発展させていく。そしてその具体的な実践論として「協同組合」理論を構築する。この「協同組合」という考え方のきっかけとなったのは，賀川が28歳の頃に貧民窟の視察のために訪れたニューヨークで労働者の示威運動を見たことであった。

この協同組合という考え方は日本中に伝播した。それは豊かさの中における貧困などを防ぐために団結することであり，賀川はこれを「兄弟愛による協同組合運動」と呼んでいる。これは野尻による賀川が再評価されている根拠のひとつであり，今日の日本の格差が生じている状況は，当時の状況と程度の違いはあるが符合する。

その後，賀川はとくにキリスト教の伝道活動に力を注ぎながら，「防貧」運動としての「協同組合」運動を広げていった。それは賀川の最終的目標が「神の国」の創造であった点からも明白である。その点に関して加山久夫は，賀川の「私はイエスの弟子だから社会運動を行うのです」という言葉を引用し，その根底にはイエスのように生きたいという強い願望があったと指摘していく[9]。これはキリストが反ローマ革命の指導者となることを信徒たちから熱望されるが拒否し，貧困や病，差別などから開放することを軸とする精神革命の道をとった点と重なっている。したがって，賀川の思想は最終的に，キリストと自己を同一化する方向へ向かっていたと考えられる。そして，この「神の国」と呼ばれる賀川の夢想する国家は，賀川が兄弟愛と呼んだ人間関係によって構築される社会である。

賀川は小説『乳と蜜の流るゝ郷』のなかで人間が共に存在し同時に栄える社会こそが自らの理想郷であるとしている。そして，この理想郷の経済活動の基盤は「兄弟愛による協同組合」にあると賀川は主張する。しかし，この理想郷「神の国」での労働対価は一体どのように決定されるのか。また，賀川の想定する「神の国」が世界全体に及んでいることからJ.M.ケインズ（John M. Keynes）がかつて構想

した世界単一貨幣によって物取引が行われることを想像していたのか。具体的には全く論じられていない点が今後の課題となるだろう。

## 終わりに　ー賀川の思想を再評価するー

賀川豊彦は1946年，『協同組合の理論と実際』をコバルト社から出版している。この中で，賀川は「協同組合運動」から世界そのものを「組合国家」とする世界連邦を既に夢想していた。賀川は，多くの事柄の先駆者であったが，とくに，筆者らが注目しているのはトルストイやガンジーらと同様非戦論を唱えていたことである。賀川は武器使用の軍事訓練を拒否し，憲兵隊に連行されるほど戦争反対の立場をとっていたが，1943年から翌年にかけて戦況悪化とともについに反戦・平和の信念を貫くことができなくなり，戦争続行を唱えている。この背景には，愛国者としての賀川の天皇に対する崇敬の念と欧米列強の植民地主義の野蛮な行為によって同胞が殺戮される現実を座視できなかった心の葛藤があったと考えられる。

また，スタンレー・ミルグラム（Stanley Milgram）は，破壊的な命令を出す権威に直面した人間がどのような行為をとるのかを実験し，膨大なデータから善良な人間の多くが権威の対象となる人物が物理的に近ければ近いほど権威に屈する度合いが高いことを明らかにしている[10]。賀川が軍部の要請を受けたのは1943年，これは1942年にミッドウェー海戦で日本海軍が潰走し，大祖国戦（独ソ戦）におけるドイツの東部戦線が崩壊し始めた頃である。つまり，枢軸国側の戦況が悪化し，かつ緊迫化していた頃である。したがって，賀川のような善良で正義感の強い人間が権威に屈する条件がそろっていた極めて特別な状況であったと考えることもできる。

賀川は日本帝国解体後においては，自身のもともとの反戦思想へと戻っていることから，戦時下において戦争続行を主張したのは偽装転向であったと雨宮栄一は指摘している[11]。賀川は戦時中の一時期，戦争を肯定したが，生涯を通して自ら武器を手に取ることはなかった。賀川の弱者救済と非戦論，そして理想主義に基づいたキリスト教の伝道や執筆活動などにより，ノーベル平和賞（４度），ノーベル文学賞（２度）の候補者となっている。

賀川の思想において，コミュニタリアニズム研究者が評価している家族愛を重視している点と経済学者が評価している「防貧」のための協同組合を創設した点に加えて，他者を暴力によって決して傷つけないという平和主義を生涯実践した点を大いに評価できるものと，筆者らは考える。賀川の理想的かつ実践的思想を今日の社会格差是正に向けていかに応用できるかが今後の研究課題である。

## 注・引用文献

1　賀川豊彦（2009）『復刻版　乳と蜜の流るゝ郷』家の光協会 pp. 406-411
2　前掲１　pp. 410-411
3　隅谷三喜男（2011）『賀川豊彦』pp. 233-254
4　前掲３　pp. 3-4
5　賀川豊彦（1921）『イエスの宗教とその真理』ミルトス出版　p. 3
6　林啓介（2010）『賀川豊彦』阿波銀行　p. 87
7　前掲５　p. 18
8　前掲５　p. 8
9　賀川豊彦『復刻版　小説キリスト』ミルトス出版　p. 534
10　スタンレー・ミルグラム（2008）『服従の心理／原題 Obedience to Authority : An Experimental View』（山形浩生訳）河出書房新社　pp. 102-122
11　前掲３　p. 243

## 参考文献（あいうえお順）

賀川豊彦（2009）『復刻版　乳と蜜の流るゝ郷』家の光協会
賀川豊彦（2011）『復刻版　イエスの宗教とその真理』ミルトス出版
賀川豊彦（2012）『復刻版　協同組合の理論とその実際』日本生活共同組合連合会
賀川豊彦（2014）『復刻版　小説キリスト』ミルトス出版
スタンレー・ミルグラム（2008）『服従の心理／原題 Obedience to Authority : An Experimental View』（山形浩生訳）河出書房新社
隅谷三喜男（2011）『賀川豊彦』岩波書店
徳島新聞2013年11月23日付掲載「郷土の偉人・賀川豊彦―日本の労働運動を指導―」